

保育のほりおこしから見えるもの

生沼晴美（青山学院幼稚園）

はじめに（問題と目的）

筆者の勤務する幼稚園では97年度から2年間、3年保育の3歳児、4歳児を対象とするビデオ記録をもとに、研究者2名と保育者全員による園内研修を行ない、実践の中から立ちあらわれてくる保育の課題についての検討を続けている。97年度は主に3歳児の「気になる子」K男と筆者の関わり、98年度は主にM保育者とY男の関わりを通して、自己の保育を振り返ることになった。この過程において、筆者は、当事者と当事者でない者の二つの立場を経験する。クラス担任として日々の保育をしていく中で、園内研修において二つの違った立場から保育の課題に向き合い、話し合うことによって、自己の持っている保育観や保育の課題に気づき始めた。

本研究は、①園内研修や保育後（97年4月～98年12月）における保育者全員の話し合いと筆者の記録、②97年度の筆者の保育記録中のK男に関する記述（K男の行動、筆者の関わり）の分析と観察を省察することによって、園内研修からほりおこされた気づきや自己の保育の課題を、今後の保育にどのように生かし、保育観を構築していくかを探るものである。

1. 園内研修から見えるものと考察

（1）「見えてこない」自己の課題

97年度の園内研修は筆者の担任する3歳児クラスの保育の検討を中心に始められた。その中で、大人の後を無言で追うK男に視点が当たる（6月）。K男は入園当初から不安が強く、遊びが見つからないことが多かった。その日の話し合いでは、K男が遊び出せる状況作りや筆者の具体的な援助の必要性が検討されているが、筆者はK男の「遊べない」状態を把握するものの、状況を改善する援助の方法が分からずにいた。その後の日々の保育後や、園内研修における話し合いでも、K男の様子が続けて取り上げられ、筆者なりにK男を受けとめて関わるが、K男が遊び込めない状態は続いた（1、2月）。この状態が続いた背景として、筆者は、K男が遊び出せない状況を受けとめながらも、この状況を作り出しているのはK男自身の問題であると捉えていたことがあげられる。筆者はK男の問題を自己の保育の課題として引き受けていなかったのである。

（2）自己の課題への気づき

98年度になると、園内研修の中心的話題は4歳児担任のM保育者とY男との関わりとなる。K男の様子は引き続き話題に上るが、筆者は当事者（筆者はK男、Y男の前年度担任）の立場と、客観的な立場から話し合いに参加する。M保育者は、Y男の状況を把握し、状況を改善する援助の方法を模索して悩む。ビデオ記録では、Y男と他児との関わりから生まれるトラブルに対応するM保育者（4、9月）の姿が映し出され、筆者はその場面のM保育者と自己の姿を重ね合わせる。そして、Y男とM保育者の相互関係が、その場の状況を作っていくことに気づいていくのである。その気づきは、また、Y男とM保育者の個別の問題から、クラス全体、さらに普遍的な問題へと広がっていくことにもなった。そして筆者は前年度のK男との関わりを、改めて問い直すことになるのである。

ここで、類似の保育の課題（(1)(2)下線部）が表れているにも拘らず、2年目の園内研修において、筆者がその課題を自己のものとして受けとめられた背景には①立場を変えることによって問題を対象化して捉えることが出来たこと、②日々の保育の積み重ねと保育後の話し合いにより、筆者の保育理解に変化が起きていたことが考えられる。

2. 保育記録から見えるものと考察

筆者の保育記録で明らかなのは、記録された事柄がK男の行動、そしてその行動に対する筆者の思いに終始していることである。以下の事例①～④から、K男と筆者の関わりを省察することによって、見えてくる自己の保育への課題を明らかにしたい。

①表面的なK男理解

97.4.28 遊びが見つからないようだ。K男を誘って庭に出て、坂を滑り下りる。K男は歓声をあげて楽しそうに遊ぶ。

97.6.18 見学者の後を少し離れて無言でついていくK男。遊びが見つからないのかな。

筆者はK男に対して「自分から楽しい遊びを見つけたい」と願っていた。表面的に表れる不安や遊びが見つからない状況は受けとめるが、状況把握はするものの、K男が遊び始められないことへの課題は持つ

ていない。K男が何をしたいのかも見えておらず、K男が自ら動き出すのを待つだけであった。

② K男との関わりの振り返り

97.11.10 朝一番に登園したK男。ゆったりと話をしながら朝の支度をした後、私に抱きついたり膝の上に座って甘える。牛乳パックでピストルを作り始めると、今度はT男が私に甘え始める。K男は、T男に本気で掴み掛かり、私から離そうとする。自分一人を見て欲しいのかな。今までの私がK男を本当には受け入れていなかったのを感じているのかな。

97.11.11 昨日の続きで「ピストルを作りたい」というので、「そうだね、作れるんじゃない？」と返すと、「だからいつも一人じゃ作れないって言ってるでしょ」と怒鳴られる。その後、一緒に作るが、すべて自分で仕上げてしまう。私はいつも「自分でしなさい」という態度でK男に接していたんだろう。一人じゃ作れないというのは、技術だけの問題ではないんだ。

筆者はK男に怒鳴られたことにより、それまでの筆者の保育行動がK男を受け入れていなかったために、K男は「いつも」突放された感覚を持っていたのではないかと振り返っている。この頃になると、K男は自分のしたいことを伝えて遊びに取り組むが、筆者はK男の発想を受け入れるだけで、その発想から遊びを深めたり、広げる行動を取っていない。

③ 遊びのきっかけを作り、楽しみを共有する

98.1.13 凍った雪の感触を確かめるように庭を走り回り、足跡を付けて喜ぶK男。私は雪だるまでも作れればと思い、スコップで雪を掘り始める。K男もレイキで雪を掘り起こし、二人で雪の山作り。K男は雪の上に砂をかけて雪の白と砂の色とのコントラストを楽しむ。男の子たちが後から加わりトンネルを掘ると、シャベルをトンネルに通して開通を確かめ、喜ぶ。

98.1.28 裏庭の柵の周りをぐるりと廻り、探検。私が坂の上にボールを投げると興味を持ってしばらく坂の上下でやりとりをする。K男は張り切ってボールを蹴る。そのうちK男は坂の下に窪みを見つけて、上からボールをその窪みめがけて転がし始める。命中させるのに夢中になり成功すると大喜びする。

3学期に入ると、筆者はK男と過ごす時間を多くし、

K男に直接働き掛けるようにする。それによって遊びが生まれ、楽しみを共有するが、遊びの援助はその場限りのものでしかない。K男と筆者の関係に限定された遊びが展開されたに留まっている。

④ やはりK男が分からない

98.2.10 T男たちの汽車遊びに入るが、K男は線路を繋げる場所、使う電車など一つ一つをT男や私に許可を求めてから動く。3、4本の線路を繋げて周囲の様子を見る。電車を走らせ始めてもすぐに止めてしまう。N男、Y男、S男は線路の周りに積み木で建物を作り、オリンピック会場にして、にぎやか。K男はその様子を見ていた。K男は指示がないと遊べない？遊び方が分からない？自分の居場所がない？私との信頼関係が出来ていないから安心して動きだせない？・・・

筆者は、K男が汽車の遊びに入りたい気持ちを感じていながら、他児とK男とを繋ぐ援助をしていない。にぎやかに遊ぶN男等とK男を対比させ、K男が遊びに入りきれない原因をK男自身の問題へ向けている。自己への課題意識はほとんど見られない。

上記の経過から、結果として、筆者はK男の自発的な行動を要求するが、その自発性が発揮されるような遊びの状況作りをしていないことが明らかとなった。K男の思いや行動と、それに応じた筆者の判断や保育行動を相互に絡ませ合いながら、遊べる状況を作り出していく視点が欠けていたのである。

おわりに（結語）

園内研修による気づきは、筆者自身の保育記録の省察によって裏付けされ、K男に対する筆者の在り方が明確となってきた。筆者はそれを、園内研修と保育記録の双方から確認することが出来た。自己の在り方ははっきりと認識することにより、今後の保育へ向かう姿勢が見えてきたのである。本研究は、自己の在り方の確認が、保育観の変容に大きな役割を果たすことを示唆する。

筆者は現在、5歳児のクラス担任として日々の保育を続けている。その中で、見えてきた保育の課題を基盤にしながら、保育における判断や具体的な保育行動を起こすことにより、子どもの状況に変化が起こることを体験している。以前よりは子どもと共に遊びの状況を作りやすくなっているように思う。実践と経験を積み重ね、その省察を繰り返しながら、さらに保育理解が深められていくことが、今後の課題である。

〔参考〕中村雄二郎著『臨床の知とは何か』岩波新書